

海外派遣

Volume 11

日本語を教えてみたい。その気持ちを抱えて、海外に飛び立つ人たちがいます。海外を目指したのはなぜなのか。そこでどんな経験を積んだのか。この連載では、実際に海外で夢を実現させた方にお話を聞いていきます。

後藤佳奈子さん



PROFILE

筑波大学で日本語教育を専攻。卒業後、ローランアン協会(<http://www.laurasian.org>)主催のプログラムに参加。

二〇〇〇年七月から二〇〇一年六月まで、アメリカ・インディアナ州の高校へ、日本語教師アシスタントとして派遣される。

AMITY Institute のプログラムで再渡米。現在は同協会にて、日米の交流事業に当たっている。

高校時代からの夢をアメリカで

「高校生の時にアメリカへ留学したのがきっかけで、日本語教師を志すようになりました。そして大学の専攻で日本語教育を学び、卒業に合わせて、日本語教師の派遣プログラムに応募したんです。派遣先はインディアナ州にある二つの高校で、どちらも、生徒が接する日本人は私だけという環境。授業では、アメリカ人の先生のアシスタントとして、漢字を教えたりしました。」

高校生に教えるのは初めての経験だったのですが、みんな授業中の態度もよく、とてもやりやすかったです。私が小学生の時から空手を習っていると聞いたせいかもしれません(笑)。

日本語を勉強している生徒は、一校が約一二〇人、もう一校が九〇人ぐらいで、アニメがきっかけで日本に興味を持つたという男子生徒が多かったですね。私のホームステイ先は日本語クラブの部長をしている女子生徒の家でした。その子は、漢字のデザイン性が面白いと言っていました。

この日本語クラブというのは、放課後、日本語に関心のある生徒が集まる課外活動です。何をするかは生徒たちが自主的に企画するのですが、お好み焼きやカレーを作ったりして、みんな楽しそうでしたね」

日本語クイズ大会で全米優勝

「アメリカでは毎年、『ジャパン・ボウル』という、高校生を対象にした日本語の大会が開催されています。三人一組で、文法や漢字、ことわざなどに関するクイズに挑戦する、日本でいう『高校生クイズ』のような形式なのですが、日米協会や日本大使館などが後援する大きな大会です。その州予選に日本語クラブの中で有志を募り、毎日特訓して初出場したところ、なんと地区優勝、ワシントンD.C.で行われる全米大会に行くことになりました。全米大会に進めるのがもう奇跡みたいなもので、みんな『首都に行けるだけでうれしい』と思っていたところ、今度はなんと、各州の代表二九校中、最終決戦に進む三校に入ってしまったんです。他校は日系の生徒がほとんどだったので、不利だろうと思っていたところ、最後は見事に全米優勝! あまりの驚きとうれしさで、私はいすからひっくり返ってしまいました。私の帰国後、賞品として贈られた日本旅行で来日した生徒たちと再会した時は、本当にうれしかったですね」

「今は、そういった経験を基にした日米交流の仕事にとってもやりがいを感じています。そして将来は、歳をとってから世界各国で再び教壇に立つのが夢。暮らしてみないとわからないその国の文化に、少しでも多く触れてみたいんです」

日本語クラブの生徒がグループに分かれて行った「お好み焼きコンテスト」

